文化

宮司さんと河童

春日山の"命"見つめて

なら民俗通信 264

西村　博美

忠麿さん、いつもの散歩途中にある小高い崖上の「蝙蝠窟」に腰をおろしていた。そこへやってきた草履ばき、股引尻からげて手に長い杖をもつ老人が、温顔に微笑たたえて言う。

「あなたも、もう十年あまりになる。あなたならば、見えるかもしれぬて。……だが余程、よく見きはめないと見えませんぞ」。

老人が言う「あなたも、もう十年」とは？　水谷川宮司就任から数えて十年目（昭和三十年）、春日大社は第五六次の式年造替、正遷宮祭を営んでいる（水谷川忠麿年譜）。かの老人の重い口からやっと忠麿さんが聞いた話は「このあたりには河童が住んでゐる。可愛い奴だからよく見てやってくれ」ということだった。

▼河童の国

忠麿さんの文章や短歌には、鹿はもちろんのこと、モリアオガエルやカラス、アヒル、ヘビもリスも現れるし、森の樹間を飛翔するムササビなんかも出てくる。

やや、脱線するが筆者（西村）も長く奈良公園内にある某事務所に勤めていたので、宿直の夜なんかは、ムササビの空中滑降を何度か目にしたことがある。

ところで当の忠麿さん、ある日、竹やぶの一隅に落ちて死んでいたムササビを見つけて、毛皮のチャンチャンコにしてしまった。そのうえで「笑ふものは笑へ。この雄大な尻尾の愛嬌と、このやはらかい毛皮の暖かさは、世界中誰一人として知ってゐるものはない」と羽織の下にムササビの尻尾をかくして、のたまうのである（「むささびの皮」）。

さて、本題の河童にもどる。かの老人の一件以来、忠麿さんもすっかり河童の虜になった様子がうかがえる。

「お水取りと春日の申祭りがすんで一週間目に、春日山河童の大結集がある」。

河童の統領の源太、補佐役の長次郎に東陽坊のもとに、高円族と春日族の二派は、たがいの縄張りを侵かさず、しっかり親分に統率されているらしい。

▼「マンタタの祭り」

そろそろ春日山にも梅雨の季節が来て、森に密生するナギが花をつけ、花粉が風に舞うようになると、春日山の河童の国は俄然活況を呈する。

河童たちは、主食の花粉採集に全力を注ぐのだ。全山七八個の老樹の穴が、彼らの森の貯蔵庫であることを見つけたのも、尾花川の清流の石に生えるミズゴケや、山のオオヤブカ（蚊）の目玉が彼らの好物であることを見つけたのも、忠麿さんだ。ナギの花粉に馬酔木の蜜（みつ）を混ぜた「花蜜酒」を三日三晩、呑みとおす河童たちの「マンタタの祭り」を忠麿さんは、楽しみに毎年のそのときを待っている。

▼冬眠する河童

先年の冬は、流行性の感冒で冬眠中に死亡した河童が七八霊あったという。

「樹上で死んだものは、梅雨の頃、風蘭になって花を咲かせる。地中のものは雪割草になって萌え出でる」。うつくしいそんな季節も、忠麿さんには少し悲しい。後に病を得て、見舞いに送られた一鉢の春蘭を絵にしながら、心にしみることがあると忠麿さんは、「画信帳」に記している。

若い日に有島生馬に油絵を習い、津田青楓門にあった忠麿さんは、絵も良くし、春日大社の絵馬も自ら筆をとった。

ひょっとすると、忠麿さん命名の河童たちの「マンタタの祭り」は、冬の寒さに死んだ仲間への慰霊の祭りであったのかも知れない。あの日、御蓋山の麓で忠麿さんが出会った「不思議な老人」もまた河童一族の親方だったのでは？

宮司の現職のまま亡くなった忠麿さんの春日の森に、ことしも梅雨の季節が去り、夏が近づくと「小さな水溜りに臨む木の枝に、蛙の卵塊の花が咲く」。水に孵った無数のオタマジャクシは、もうすぐモリアオガエルになる。そんなころの河童は、ボーフラが成虫の蚊になるのを待ちかねている。夏至の日が来るまでの採集を禁じられているからだという。

山の稜線に月が出る。春日河童と高円河童たちは、木の洞（ほこら）に溜め込んだ「花蜜酒」を抱えて、忠麿さんに明日も会えるのを楽しみに待っている。

（詩人、奈良民俗文化研究所研究員）

……

水谷川忠麿（1902～1961年）。随筆集『南瓜の花』1932年、本稿の引用は『紫山水谷川忠麿遺稿』（同遺稿集刊行会、1971年）による。

御蓋山（撮影・安田藤四郎）

▼水谷川忠麿宮司

わが国の民俗学を拓（ひら）いた柳田国男や折口信夫は、「河童」（かっぱ）について多くの論考を記している（柳田『山島民譚集』、『妖怪談義』、折口『河童の話』）。

それとはまた別に、水谷川（みやがわ）忠麿の愉快な河童もいる。春日大社の宮司だった水谷川の河童ばなしは、こんなふうだ。

「春日山に河童がゐる。このことはあまり知られて居ない。（略）春日山のどの谷には、どんな苔があるとか、珍らしい花が咲くとか、春日山には六十三種の鳥がゐるとか、教へてくれる人はあつても河童のことを口にした人は、未だ嘗てない」。

水谷川は、旧東京府落合村に近衛篤麿の四男として生まれ、後に春日神社宮司・水谷川忠起の養嗣子となっている。昭和二一年、春日大社宮司。ちなみに前回に触れた森口奈良吉は、禰宜・権宮司として、水谷川宮司父子二代にわたって仕えている。以下、忠麿さんと呼ばせていただく。

▼忠麿さんと河童

忠麿さんに河童のことを教えたのは、御蓋山（みかさやま）の麓に出会った「不思議な老人」だという。

聳え立つ「浮雲の峯」に源を発して、北へ走る水谷川と、南へ流れやがて西に折れる小さな流れのあたりは、渓谷を成している。